

Flinders Petrie: The Making of Egypt
London 1939. p. p. XVI. 188. pl. 82.

凡そ埃及學を口にする者は、倫敦大學、埃及學教授たる著者の名を知らぬ筈はない。教授は一八五三年六月三日チアールトン(Charlton)で生れて居るから、日本流に數へると宛も八十八歳にあたるその誕生日に本書を紹介の筆をとるのは感慨無量なるものがある。

著者が序に於て、曩に著述した三冊よりなる埃及史、並に、雜誌「古代埃及」(Ancient Egypt) 1931 p. 1-20 に説けるものとの關聯を指摘し、本文に入つて、國土及水系の生成、人類の住込に筆をおこし、石器時代の末より、デル・タサ(Dah-Jasa)期、バダリ(Badri)期の遺物を説いて居る。これは著者に依れば、後者は西曆紀元前七五〇〇年頃に始まるとして居る。この期には土器の製造の他に婦人像等が見られ、象牙細工も存して居ると説く。次にアマラー(Amah)期を前後に分つて、この後期には、下埃及の王冠となつたものが既に表はれ居り、燧石細工が餘程進んだとして居る。ゲルゼー(Garzeh)期に於ては、始めて硝子の破片あるを説き、銅の使用範圍が、鋸・斧・短劍となつたことを示して居る。その他、この期は遊戲の道具が表はれ、球を轉して目的物を倒す類のものが見られる。更にセマイネー(Semaneh)期には文學の起源とも見られるものが表はれて居ると説いて居る。斯くして、茲に王朝以前の時代が終る。

著者は進んで、王朝以前に王とも見るべき者があり得たとの考へを示して居り、且、第一王朝の始めを、紀元前四三二〇年とさせるが、埃及史、第一卷、一九二三年の改訂版(十版)の紀元前五五四六年なると比べて、千二百年も繰下げられた。尤も前記の通り、「古代埃及に」は紀元前四三二六年として居る。(A. E. 1931. Pt. I. p. 13)。以下この種の年代のことは省略する。

第一王朝は、文學の上に、寶飾品に、その他の美術工藝品に於て長足の進歩をなし、漸次、古王國文化の極盛、第四王朝に達し更に衰退の迫りつゝあるを叙して居る。

第十二王朝の興隆までの、比較的史料の少い時期について、或は露西亞方面よりの交渉をとき、或はドリヤ族(Dorian)との接觸を擧げて、その推理の上に大家としての貫祿を示して居ると思はれる。

精巧、透徹の文化を有した第十二王朝をといて、紅花崗岩の石棺の計測の精確なること僅かに、一時の四百分の一の誤差が檢せられるのみとし、是、實に古代埃及を通じて誇り得るとして居る。

ヒクソス(Hyksos)について、ヒツチ(Hitt)との關係をときヒクソスの武器より遊戲の道具に迄及んで居る。

最後、第十八王朝以降は一章の内に纏めて居り、ミタニ(Mitanni)の影響、ミケナイ(Mykenae)の藝術、更に波斯、希臘との關係に互つて居る。

以上の如く、本書は比較的多くの頁數を王朝以前の叙述に割宛

て、居り、王朝以後、殊に新王國以降は寧ろ、簡單すぎないかと思はれる程である。この點は在來の古代埃及をとくものと餘程差異がある。素より書名が埃及の生成であり、その崩壞過程については省略せられたる點の多いことと解せられる。

ランケ(Ranke)は素より、日本流に數へて八十三歳にて近代民主政治(Modern Democracies)を著述したブライス(Bryce)の高齡尙、健筆であつたことを考へると共に、茲に本書の著者の健康を祝して、江湖に推擧する拙い紹介の筆を擱きたい。(岡島)

ルネサンスのヒューマンストの見解

ワレス・K・フアーガソン

Humanist Views of the Renaissance: Wallace K.

Ferguson (American Historical Review Vol. XLV.

No. 1.)

ブルクハルトの「伊太利ルネサンスの文化」をめぐつて若起された所謂ルネサンスの概念論争は最近の史學界に於て極めて絢爛たる場面を展開せしめた問題であるが、現在に於てはこの論争を、その頂點がルネサンス時代にある近代史學史の一部として見得るに至つたと思ふ。就中、ブルクハルトに對する批判中最も重要な部分は、彼の藝術に對する愛着から來る非歴史的な偏見の結果、中世とルネサンスの連続性を無視せんとした事に對するものであり、普通それはルネサンス人自身の考へからの傳統を受繼ぐものとされるが故に我々はこの問題を徹底的に追求するためには

ルネサンス人自身のルネサンス觀に迄遡らねばならない。著者の主たる目的はかかる見地に立つ研究であるかの様に思れる。氏はこの論文に於て Burdach や Borinski の如き單なる一片の「復興」「再生」の語にルネサンス精神を認めたり、再生の理念の哲學的表現を歴史的理念よりも重んじて追求して行つた態度に反對し「伊太利ヒューマンストの作品中の「再生」もしくは「中世」の問題に關する一貫した、全體的な議論」(p. 3)の考察を試みてゐる。論文の構成は政治に關するものと文化に關するものとの二部に分たれる。

一

ヒューマンストは近代史學の開拓者である。種々な點で批判はあらうが彼等の歴史敘述の中で第一流のものは廣い觀點、論理整然たる組織、批判的精神等を持つる點に於て中世の素朴な年代記の水準を遙に抜くものなる事は否定出來ない。しかも彼等は歴史を單なる神の攝理の顯現とは見ずに人間の動因により動かされた人間の記録と考へたのである。それは多分人文主義者が教養ある市民として新興國家の實際政治と外交とを代表した事によるのであらう。

中世に於てはローマ帝國はダニエル書の第四帝國であるとされ帝國永続は中世人の信念であつた。したがつてそこにはローマの文化、帝國解體後の暗黒時代、文化の復興等の區別は認識され得ない。帝國の没落に氣付いたものもそれは世界が終滅へ近づく歴史の一般的衰微の徴候と考へた。ダンテの帝國觀もこの範圍を出